

TRAIN と Merit

Merit Network, Inc.
平原 正樹



私は、米国のミシガン大学にあるメリット・ネットワークで研究開発を行っている。ここは、ミシガン州の幾つかの公立大学が、大型計算機の共同利用を促進するために設立したネットワーク運用センターである。独立した非営利法人であるが、組織運営上のオーバーヘッドを省くため、便宜上、職員はミシガン大学を通じて雇用されている。現在は、100名程度の職員を抱え、8割方は、ミシガン州の教育機関や図書館などの公共機関向けのインターネットのプロバイダ業務を担う。10数名規模の研究開発部が、NSFバックボーン時代から、インターネットの運用技術の発展を支えてきた歴史を持つ。

社会の仕組みが異なるとはいえ、メリット・ネットワークに近い役割と背景を持つ組織が、共同利用機関である大型計算機センター（のネットワーク掛）と言える。（現在は、組織が変わってしまったそうだが、長らく、日本を離れているため、ご容赦頂きたい。）私が、メリット・ネットワークの紹介をするのは、単に今、私が所属するからではなく、この組織こそが、当時、TRAINをはじめた時に私たちの頭に浮かんでいた理想像の一つだったからである。

米国でも、地域ネットワークの時代があったが、政府の支援が打ち切られた後、その多くは消滅した。生き残ったものの幾つかは、商業プロバイダへと衣替えしたり、買収されたりした中で、メリット・ネットワークによって運用されるMICH（ミシュ）ネットは、ミシガン州という限られた地域で、教育機関や非営利の公共機関を対象にしながら、独立採算で発展を続けてきた、非常に稀な例である。

業務の職員は、サービスを受ける組織の会費収入などで、研究開発部は、日本での科研費に相当する研究費などによって、独立採算で、雇用されている。つまり、米国では当たり前だが、外部研究費の申請が毎年のように通らなければ、研究者は自動的に解雇されてしまう厳しさを持つし、業務も他のプロバイダとの競争に負ければ、職員数は減らさざるを得ない。サービス

は、地域的に限定されているが、ここでの研究開発は、地域限定でない、米国でも第一線のものである。

日本と米国の仕組みは異なるので、必ずしも、同じことが当てはまらないことは判っている。また、当時の大型計算機センタで、ずっと、TRAINのような地域ネットワークが、運営し続けられるとは思えなかった。だが、大型計算機センタの支援を受けたTRAINの形態が最も、確実な第一歩であったことは確かだ。どうせやるなら、自主的にやったほうがいい。

NSFネットが、商業プロバイダに取って変わった時、多くの人々が、研究ネットワークが不要と錯覚した。しかし、商業プロバイダが提供するサービスは、研究教育機関の運用に役立っても、先取的な研究教育の要求を満足させられない。その結果、Internet2に代表される大学群の主導による産学共同の研究ネットワークの出現となるのだが、こういった新しい動きに、地域ネットワークの枠組で、積極的に参加することは意義があるだろう。ここメリット・ネットワークでも、近隣の大学を取りまとめ、Internet2へのギガポップの設置、高速アクセスラインの資金申請など、地域の研究ネットワークインフラおよびその高度利用を発展促進させるために、主導的な役割を期待され続けている。

私は、TRAINの立ち上げだけして、大型計算機センタを去った。今、思えば、たった1年10カ月しかいなかった。私が赴任したとき、指先でひと押しというところまで来ていたから、私の在任中に、偶然、機が熟したのである。私は、その後、TRAINのことは断片的に聞くだけだった。解散したと聞いた。TRAINを始める時、プロバイダとしてのサービス提供と、コミュニティとしての地域ネットワークと、片方だけするのか？ 両方するのか？、議論を重ねた思い出がある。どのような方向を選ぶかは、そこにいる人たちが決めることだから。